

# モードは語る

中野 香織

アートのモチーフがファッションに用いられることは少なくない。世界的に認知されている「日本的」なモチーフに、葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」がある。海外では「ザ・グレート・ウェーブ(大波)」として知られる。富士山が遠景に小さく見え、手前には砕け散る瞬間の大波が立ち上がり、波の先端が泡立ち、水滴は富士山頂の雪に重なっていくという大胆な構図の版画である。波頭は、小舟で身を寄せ合う漁師たちに今にもつかみかからんとする生き物の爪にも見える。

デザイナーの桂由美さんが迎賓館赤坂離宮でおこなったファッションショーで、この柄のドレスが登場した。2016年

## 北斎の大波モチーフ

# 「はかなさ」からかう爪

には、ロシアのデザイナーもこの絵にヒントを得たコレクションを発表しているし、過去にはジョン・ガリアーノ時代のディオールも「大波」柄ドレスを出した。絵柄を単純化した図をロゴにしているサーフブランドもあるし、少し検索すればネクタイからスパッツまであらゆるアイテムに使われていることがわかる。

「大波」がモチーフにされる理由は、多くの場合、特徴がありスタイリッシュだから、という単純なものであろう。しかし、ドキュメンタリー映画「大英博物館プレゼンツ 北斎」(3月24日公開)を見て心を動かされてしまうと、ここに別の意味合いを読み込みたくなる。



迎賓館赤坂離宮で発表されたユミカツラのドレス

幼少時から88歳まで毎日絵に没頭した北斎の人生の後半は壮絶である。60歳を過ぎて脳卒中を起こし、妻を亡くし、孫の借金返済のために家まで売り極貧生活を送る。70歳を過ぎて富嶽三十六景を描くものの(この頃「大波」を制作)、80歳近くになって火事にあい、絵筆一本を残し焼失する。それでもくじけることなく挑戦を続けたのである。

北斎は110歳でようやく自分の描く絵が理想のレベルになるだろうと信じ、向上を目指した。88歳で富士の頂から天に向かう龍を描き、永遠に語り継がれる伝説になった。そんな物語を知ると、年とともに画力を増す北斎を連想させる大波の波頭は、若さに価値を置き、はかなく消費されるモードという営みを高みからからかう、生き物の爪のようにも見えてくるのである。(服飾史家)